

# 中学校音楽科における指導と評価の一体化を目指した歌唱指導に向けて

和歌山大学教育学部：菅 道子(研究代表)、上野智子  
附属中学校：那須祐哉

## 1. はじめに(共同研究の趣旨と目的)

附属中学校では、毎年 11 月に校内音楽会を開催している。そこでは、生徒が中心となり練習を含め、会の運営を担っている。この時期はそれを補強する形で音楽科の授業も計画している。しかし、これまで合唱曲に取り組む際、大変意欲的に練習する生徒がいる一方で、なかなか前向きになれない生徒もいた。そこで、どの生徒も学習課題を自分事として捉えてもらいたいという思いから、生徒主導の授業への転換を図っている。

また、本校では学習指導要領の改訂に伴う新しい評価の在り方について研究をすすめており、音楽科においては「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当ててきた。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』(国立教育政策研究所教育課程研究センター編 2020)によれば、「主体的に学習に取り組む態度」では、「① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」(以下「①の側面」)、「② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面(以下「②の側面」)」の 2 つの側面を評価することが求められるとしている。教員が②の側面を適切に評価し、生徒に分かりやすい形でフィードバックすることで、生徒は①の側面を伸ばすことになり、結果的に②の側面も伸ばすことになるのではないかと考えた。

そこで、大学教員と中学校教員が連携して、「主体的に学習に取り組む態度」の 2 つの側面を育むような指導と評価が一体化した音楽科授業のあり方を検討することを目的に、本研究が開始された。なお 2021(令和 3)年度は、共同研究の第一歩として、授業実践の検討を行った。

## 2. 研究の経過

本年度の研究経過は、表 1 のとおりである。

表 1 2021(令和 3)年度の研究経過

月日	概要
2021 年 8 月 20 日	問題の共有(音楽科の評価について)と研究課題の設定
2021 年 10 月 29 日	研究授業と協議(附属中学校研究協議会後に実施)
2022 年 1 月 10 日	研究の総括と今後の課題について

## 3. 授業の概要

本年度は、2021(令和 3)年 10 月 29 日の附属中学校研究協議会で実施した第 1 学年の授業を本研究の検討対象とした。本授業は、題材名《大切なもの》とした全 7 時間計画の第 5 時限目にあたる(表 2 参照)。

本題材においては、課題意識をもって活動し、お互いの気持ちを通い合わせながら、自らが意欲的に表現することができるよう、パートごとの活動や学級全体で合わせる活動を生徒たちによ

表 2 題材名《大切なもの》の学習計画

時間	学習活動
1	示された 8 曲の音源を聴き、校内音楽会でどの曲を演奏したいかを考える
2	最初～33 小節目までをパート別で音源に合わせて歌う
3	34 小節目～最後までをパート別で音源に合わせて歌う
4	A・B の部分の表現を考える
5	C の部分の表現を考える(本時)
6・7	仕上げ

って運営する場面を増やした。また、主教材《大切なもの》(山崎朋子作詞・作曲)は、11 月 26 日に行われる校内音楽会での発表曲として取り組んでいる曲であり、本題材において、生徒たちは混声 3 部合唱に初めて挑戦する。《大切なもの》は、ユニゾンで始まり(A の部分)、女声と男声の多声的な重なり(B の部分)を経て、クライマックスでは和声的な重なり(C の部分)というオーソドックスな構成である。本題材を通して、生徒たちが心情やイメージなど楽曲から感受したこと、曲の構造や歌詞の内容など知覚できることが関わり合っていることを理解した上で、よりよい表現につなげることができるようにしたいと考えた。そこで本時では、C の部分において、曲想や「大切なもの」とは何かを考えることを通して、気持ちの込められた演奏にするためにどのように歌えばよいかを考えることを目標に設定した。本時の目標と展開は以下のとおりである(表 3 参照)。

表 3 本時(第 5 時)の目標と展開

本時の目標	C の部分において、曲想や「大切なもの」とは何かを考えることを通して、気持ちの込められた演奏にするためにどのように歌えばよいかを考える。	
本時の展開		
	学習活動	指導上の留意点 * 評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発声練習、体操</li> <li>・既習事項の復習</li> </ul>	各パートの旋律を範唱 CD で流す。 C の部分をパートごとに歌う。
展開	気持ちを込めて C の部分を歌おう。 ・C の部分を合わせて歌う。 ・C の曲想をつかむ。 ・曲から伝わる「大切なもの」とは何かを考える。(全員) ・C の部分をどのように歌いたいかを考える。(各パート)	録音しておき、聴かせる。 * 曲想や曲から伝わる「大切なもの」とは何かを考えることを通して、気持ちの込められた演奏にするためにどのように歌えばよいかを考えることができるか。(思・判・表)
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員で合わせて歌う。</li> <li>・振り返りを行う。</li> </ul>	ロイロノートで録音させる。 * 本時に分かったことやできるようになったことを振り返るとともに、今後どのように生かしたいかについてワークシートに記入できるか。(主)

表 3 にみるように、本授業では《大切なもの》の C の部分について、曲想や歌詞を確認するとともに、「大切なもの」とは何かについてクラス全員で話し合った。さらに、それを踏まえて各パートで C の部分の表現の工夫について話し合い、話し合ったことを実際の歌唱に生かしてみようという形で進めた(写真 1)。まとめとして、最後に全員で合わせて歌ったのち、振り返りを行った。また、評価規準については表 4 のように設定した。本授業は、表 3 に示したように、「思考・判断・表現」の評価が中心となる。加えて、「展開」部においては、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が

関わることは当然である。これに対し、教員が特に冒頭課題に示した「②の側面」を適切に評価し、生徒にフィードバックすることが重要であると考え、本授業では振り返り(表 3 網掛け部分)で行った。その際、ICT 機器を活用することにした。現在、本校では生徒に 1 人 1 台 iPad を持たせ、ICT 機器を授業で積極的に用いている。音楽科では教室内でインターネットを用いて学習支援を行うためのプログラム・システム・アプリであるロイロノートを活用している。ロイロノートでは、今まで取り組んだ資料や写真、録画、録音したデータの保存ができ、生徒たちは好きな時に見返す・聴き返すことができるだけでなく、課題を提出したり教員からのフィードバックを受けたりすることもできる。本授業においてもロイロノートを用いて振り返りとフィードバックを行った。



写真 1 パート練習の様子

表 4 題材名《大切なもの》の評価規準

知識・技能(知)(技)	思考・判断・表現(思・判・表)	主体的に学習に取り組む態度(主)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解している。(知識)</li> <li>・創意工夫を生かし、全体の響きや各声部を聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付け、歌唱で表している。(技能)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を理解し、旋律、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きの生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を理解し、旋律や強弱の生み出す曲想の変化に関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。</li> </ul>

#### 4. 成果と課題

本授業および授業後の検討会を通して得られた成果と課題は、以下の通りである。成果については、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、生徒主導の授業展開によって、授業に意欲的に参加しようとする生徒が増えたことである。生徒たちは自分で授業を進めていくことに楽しさを感じ、特に一斉授業ではあまり前向きに参加しなかった生徒の意欲の向上が見られた。また、教師にとっても生徒を見取る時間が増え、支援の必要な生徒に対応できるようになった。

2 点目は、ロイロノートによる振り返りとフィードバックによって、個々の生徒の思いや気づきを知ることができるとともに、フィードバックによって生徒それぞれが課題意識をもって学習に取り組めるようになったことである。これまで、1 時間の授業内において観察法で見取るだけでは、対象とできる生徒に限りがあったが、ロイロノートによる振り返りに教師が目を通すことで、なかなか自分の意見を言えない生徒や目立たない生徒の気づきや良い点について把握することができるようになった。また、フィードバックにより生徒は自分の学びの良かったところや改善をどのよう

に行えばよいのかを知ることができ、さらなる意欲につながった。

一方、課題としては、生徒たちがよりよく考え、自己調整を働かせるためには教師が授業のプロセスをもっと丁寧に示す必要があった。具体的には、以下の4点があげられる。

1 点目は、具体的な問いを設定することである。歌詞が表す意味やイメージが何かを考える場面では、ほとんどの生徒が「大切なもの」という言葉のみからイメージを膨らませてしまっていた。非常に活発な意見交換がなされた反面、作品の文脈で考えることが難しくなってしまった。

2 点目は、音楽の要素に注目させるような手立てを講じることである。授業実践で扱ったCの部分においては、「音域の広がり」「和音の厚さ」「クレシェンド」といった音楽を形づくっている要素を、表現を工夫するための手掛かりとして、もう少し丁寧に示していれば、作品の構成をより理解でき、表現に生かすことができたと考えられる。

3 点目は、音楽を視覚的に捉えるような手立てを講じることである。例えば、グループごとに拡大した楽譜を用意して、解釈を書き込み、それに基づいて演奏するなど、音楽を可視化し、共有できる方法を考えていく必要がある。

4 点目は、言語化する活動における学習支援の充実である。振り返りなど言語化する活動では、文章力にできるだけ左右されない評価を目指している。毎回の振り返りに対してフィードバックをしていくことで書くことを苦手とする生徒も少しずつ記述できるようになってきた。それでも、音楽用語や、音楽を形づくっている要素などを結びつけながら言語化することは困難が伴う。生徒の学習経験とこうした音楽用語や要素の理解が結びつけられるよう、音楽室内の掲示物の工夫や、ロイロノートの効果的な活用を模索していく必要がある。

本研究は初年度であり、公開授業を参観し、テーマを定めず自由に研究協議することからスタートした。評価は生徒たちの学びを豊かなものにし、教員の指導を改善、更新していくために重要であることを改めて確認した。次年度はもう一步授業実践の中身に即して研究をすすめていきたい。

#### 参考文献:

- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター編(2019)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 音楽』東洋館出版。
- ・間渕由紀子編(2021)『新版 コーラスフェスティバル 混声合唱曲集』正進社。